

特定非営利活動法人ピースビルダーズ
外務省NGO補助金プロジェクト企画調査事業



ヨルダン川西岸地区地方コミュニティにおける
青少年のニーズアセスメントと
演劇グループの実態調査



特定非営利活動法人ピースビルダーズ

広島市中区小町 1-20 Tel:082-247-0645
<http://www.peacebuilders.jp>

NPO法人ピースビルダーズは2005年から紛争後国の平和構築に取り組んできました。1945年原子爆弾による未曾有の破壊を経験した広島を本拠地に、紛争が終わった後に残された人々が、残された土地で、残された財産、残された様々な材料を使って社会を立て直していく活動を支援しています。また同時に、日本に居る人々に、世界で起こっている様々な問題を発信する啓蒙活動も行っています。そのトピックはルワンダやシエラレオネといった激しい紛争を経験した土地に関する話題をはじめ、世界の貧困問題や南北の経済不均衡といった根本的な問題も扱っています。

2009年以降、ピースビルダーズは様々な人権侵害が報告されるパレスチナ問題をテーマとした講演会や勉強会を行っています。パレスチナは1948年のイスラエル建国を大きなきっかけとして、以来、長く政治的に非常に不安定な状況にあります。大きな戦争も経験し、和平に関わる合意もなされましたが、未だその和平プロセスに進展はありません。

パレスチナとイスラエルの間に横たわる問題は、宗教対立、民族対立、土地問題といった様々なキーワードで語られますが、最大の問題点は片方の国が一方向的に国境をつくり、巨大なコンクリートの壁をつくり、人の移動を制限し、さらにはもう一方の土地に合意もなく入植地を建設していることです。不当な支配体制に対して国際的な批判が高まっています。

2010年10月、ピースビルダーズのスタッフが外務省NPO補助金を受け、広島市立大学教授宇野昌樹氏のご協力を得て、パレスチナへ飛びました。パレスチナに住むふうの人々と話をするため、そして不当な支配に屈しない、力強い活動をしている人たちにピースビルダーズが力になれる可能性を探るため、エルサレム、ベツレヘム、そして南部ヘブロンを訪問しました。この報告書はそのパレスチナ渡航の内容を報告するとともに、今後の活動可能性について検討するものです。



CONTENTS

Introduction
滞在の目的について P3
Brief introduction on Palestinian towns
パレスチナの街の様子 P5

Children in Surif village
スーリフ村の子どもたち P7
Palestinian theatre groups
現地演劇団体の調査 P11

Conclusion
滞在のまとめ P13

INTENTION

パレスチナ域内に生活する青少年の状況についての基礎調査とニーズアセスメント

パレスチナに限らず、多くの社会で次世代を担う若年層を育てることは重要な課題となっています。特に、問題が長期化しているパレスチナでは、出生の時点からイスラエル・パレスチナ間の緊張した関係に直面しています。その中で若い世代がどのような生活をしているかを知ることは非常に重要なことです。

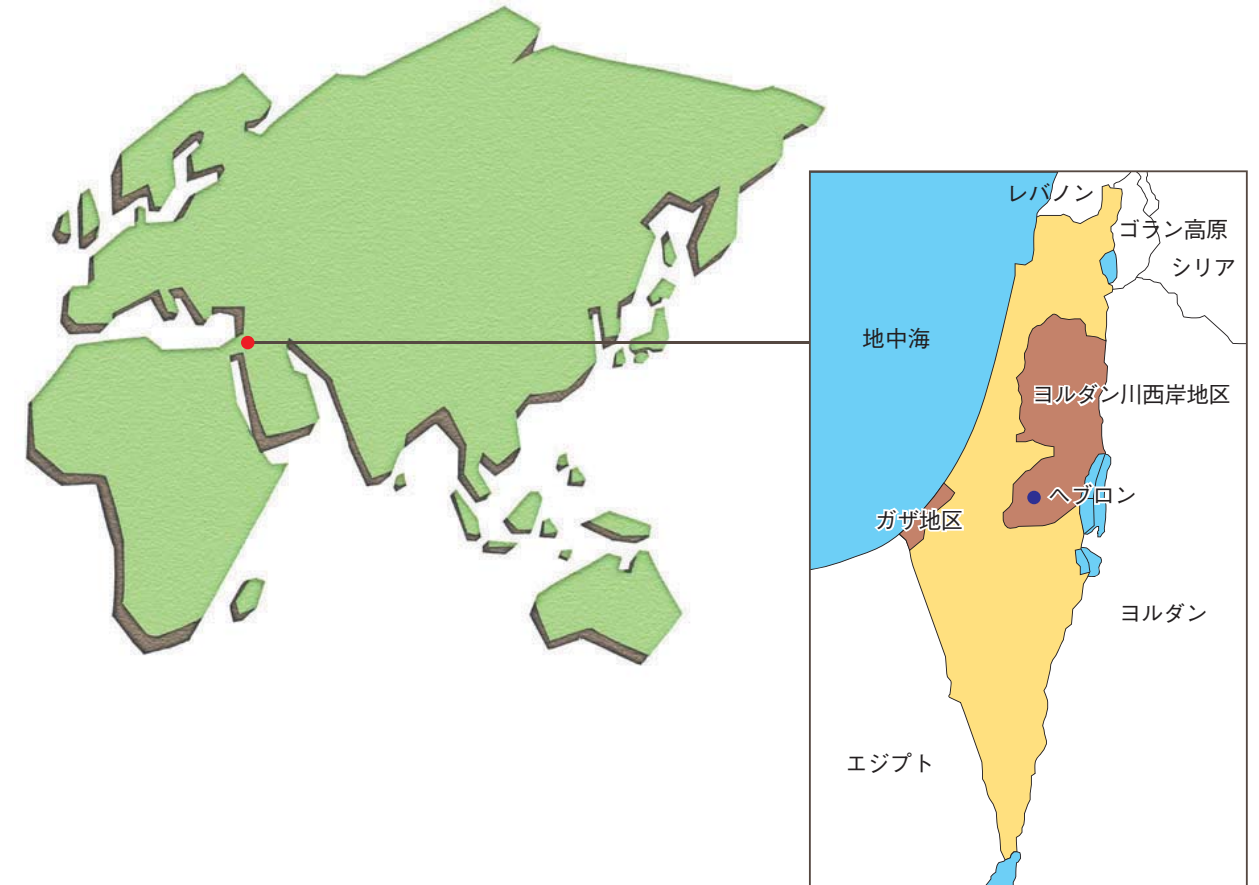
特に移動、就労の不自由さや政治的な不安定さ、状況に対する無力感や心理的なストレスが過激行動に刺激される要因になっているといわれます。これらの心理的ストレスの軽減や転換のために、演劇を使った表現教育が有効と考えられています。今回の調査では、それらの実現可能性について、現地の人たちのニーズ調査も目的となりました。



INTENTION

現地で活動する演劇団体との活動協力の可能性の模索

表現教育には多く、演劇的な手法が用いられます。単に演じる方法を教える、というわけではなく自分の見たもの、聞いたもの、体験したものの、感じたこと等を、言葉や身体を使って他者に伝えていく、演劇に共通した方法を材料として使います。そのため、パレスチナで活動している演劇団体に、表現教育に取り組む団体が存在しているか、そしてその活動内容はどのようなものか、直接出向いて話を聴きに行きました。



滞在の概要

- [目的] ・ パレスチナ域内に生活する青少年の状況についての基礎調査とニーズ・アセスメント
・ 現地で活動する演劇団体との活動協力の可能性の模索
- [滞在期間] ・ 2010年10月27日～11月5日
- [調査実施都市] ・ スーリフ村 東エルサレム ヘブロン
- [調査員] ・ 今村沙絵 (NPO法人ピースビルダーズ)
・ 宇野昌樹 (広島市立大学国際学部教授)
- [調査協力] ・ Surif Women's Cooperative
・ Palestine National Theatre
・ Yes! Theatre
・ Al-Jawwal Theatre



表現教育って??

表現教育とは、自身の表現を他者と共有することでコミュニケーション能力や他者理解の能力の発展を促すものです。強い心理的ストレスがかかる状況下では警戒心やおびえが強くなり、他者に対して攻撃的になったりコミュニケーションを回避する傾向があります。身近な人々との安心感がある環境の中で自分を表現しながら、他者を受け入れる能力を高めることで、過剰な緊張感を緩和することが期待されます。

国際協力の現場では、イラク難民に対する社会心理ケアの一環として、演劇や絵画を利用した表現教育が実践された例もあります。

東エルサレム

JERUSALEM 溢れる観光客

多くの方がご存知の通り、エルサレムにはキリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒にとっての聖地があります。なかでも、キリスト教徒にとっては、イエスが十字架を背負って歩いたとされる石畳の道や、キリストの墓とされる場所に建つ聖墳墓教会などへ、たくさんの観光客が訪れます。通りには大きな観光バスが往来し、東エルサレム側のホテルもたくさんのツアー客で満員でした。



JERUSALEM パレスチナの街並とイスラエルの街並

エルサレムの帰属については論争が絶えませんが、大きく、西エルサレムにはイスラエル系の住人が多く、東エルサレムにはパレスチナ・アラブ系の住人が多く生活しています。東エルサレムはその他のアラブの国々とも通じる、少々雑多な雰囲気もある一方で、西エルサレムは驚くほどヨーロッパ的な景色が広がっています。



JERUSALEM 東エルサレムの中のイスラエル人

エルサレムは前述の通り、ユダヤ教徒にとっても大変重要な場所です。また、観光客も多く、経済的なメリットが非常に大きいと言えます。そのためエルサレムの街をその領土内に組み込むことはイデオロギー的にも、イスラエルにとって非常に重要な課題となっています。実際、東エルサレムの街はパレスチナ自治区のその他の街と検問所や分離壁によって、物理的にも経済的にも分断されています。

また、東エルサレムの街中にもイスラエルの国旗がたくさん掲げられています。政府から援助を受けたイスラエル市民がアラブ系住民の家を買取って移り住むケースが多発しています。

分離壁とチェックポイント

CHECKPOINT 街から街を分断する巨大な分離壁

パレスチナを知る上で大変重要なのが、分離壁の存在です。2001年イスラエルによって一方的に建設が始まった高さ4mの壁は、戦争後に定められたグリーンラインを大幅にパレスチナ側へずれて建設されています。すでにヨルダン川西岸地区とイスラエルが接する部分のほとんどが、壁に囲まれています。



CHECKPOINT 国境のような検問所

壁の一部に、人や車が通れるゲートがあります。イスラエルの兵士が待機する検問所(チェックポイント)が設けられ、持ち物のエックス線検査と金属探知、IDまたは外国人の場合はパスポートをチェックします。車の場合は座席やトランク、乗客の持ち物を確認し、同様にIDの提示が求められます。朝や夕方はいくつかの人が詰め掛け、30分から40分待たされることも珍しくありません。

CHECKPOINT エルサレムに出られる人と出られない人

検問所を通れば、誰でも自由に行き来できる、という訳ではありません。東エルサレムの周辺は検問所や分離壁によって、他の西岸諸地域と分断されている状況にあります。東エルサレムに居住するパレスチナ人にはエルサレムに居住権があることを示すID(通称:Blue ID)が発行されており、このIDを持っている人物は他の西岸地区とエルサレムの行き来が可能ですが、Blue IDを持っていない他の西岸地域の居住者は検問所で止められ、エルサレムに入ることができません。

ヘブロン

HEBRON 由緒ある街

ヘブロンはパレスチナ自治区の南側に位置する大きな街です。旧約聖書に登場し、神に油を注がれて誕生した最初の人類イブラヒームの街とされ、人類最古の街の一つとして数えられています。ヘブロンの街は大きく、新市街と旧市街に分けられます。旧市街は紀元前から現存する、城壁に囲まれた街です。その旧市街に向かって丘からなだらかな坂道が続き、商店やショッピングモールが立ち並ぶ新市街が広がっています。

HEBRON 封鎖された旧市街

入植地に住むイスラエル人を保護する目的で、ヘブロンの旧市街の一部が封鎖され、その地区に住んでいた人も移住を余儀なくされました。道の途中には、銃を携帯した兵士が待機し、小学生たちはその横をすり抜けて通学しています。また、イブラヒームとその家族が葬られているモスクの建物は、その半分をシナゴーク(ユダヤ教寺院)に変えられ、建物に入る人は必ず検問を受けなければなりません。それまで大変なにぎわいを見せていた旧市街は、平日の日中にも関わらず閑散としたものでした。

HEBRON 巨大な入植地 キリヤット・アルバ

パレスチナ自治区内の多くの場所に、イスラエル人が居住する「入植地」があります。イブラヒームはユダヤ教徒にとっても大変重要な存在のため、ヘブロンにも多くの敬虔なユダヤ教徒が集まり、巨大な街「キリヤット・アルバ」を形成しています。1968年から建設が始まったこの入植地は、パレスチナ自治区内に多数ある入植地の中でも最も古いもののひとつで、今も拡大しています。



スーリフ村の子どもたち

Children in Surif village



SURIF 壁に隣接する人口14,000人の街

スーリフ村はヘブロン行政区内北西部に位置します。1948年戦争後のグリーンラインにほぼ隣接しているため、分離壁の建設に多大な影響を受けてます。その他地域の状況と同じく、分離壁は、グリーンラインを大幅にパレスチナ側に越えて建設されています。分離壁建設を理由に土地の多くをつぶされ、元々所有していたオリーブ畑の耕作が出来なくなったり、壁があることで迂回路を取らざるを得なくなり、イスラエルの街に働きに行くことが困難になったりと、深刻な被害が出ています。

SURIF スーリフ村へのアクセス

スーリフの街からヘブロン市街、ベツレヘム市街までは、サービスバスと呼ばれる中型ワゴンタイプの乗り合いタクシーで幹線道路との接続地点まで約20分程度の道のりを行った後、その接続地点から更にサービスバスを乗り換えて約1時間程度で入ることができます。



SURIF 就学率、進学率は高水準

スーリフには4校のプライマリースクール、そして3校のセカンダリースクールがあります。このうち5歳から10年間のプライマリースクールが義務教育とされており公立校は無償で受ることができます。男女の就学率はほぼ同等であり、性別による教育格差は見受けられません。セカンダリースクール以降の進路としては、近郊都市のベツレヘム大学、ヘブロン大学への進学者が多いそうです。高等教育に進む比率は比較的女子生徒のほうが割合が高く、女子のうち60~70%が大学へ進学、男子は45~60%が大学へ進学し、他は職業訓練のための専修学校へ進学や就職などです。

SURIF 通学

スーリフの街の中に入る大型バスの運行はありませんが、サービスバスが学校の前に止まり、通学時間に合わせて運行しているため、生徒は徒歩、またはサービスバスを利用して10分程度の範囲で通学をしています。学校から街の端までの運賃は片道5シェケル(調査時点で1シェケル=約25円)程度です。



SURIF

家庭環境

1世帯につき、家族は6名程度が一般的で、3~4名の兄弟がいる家庭が多くあります。前述の通り、スーリフはグリーンラインまたは分離壁建設地域に隣接しており、土地の接収など物理的な搾取を受けていることから、イスラエルへの反発心が高い子どもが多い様に見受けられました。兄弟のうちに第2次インテファダや分離壁建設への反対運動に参加した者が居る子どもは決して珍しくありません。今回話を主に聞いたSurif Women's Cooperativeのメンバーの一人も、息子がイスラエル兵に逮捕され拘留されているそうです。



SURIF

学校以外のアクティビティ

学校の授業外での参加アクティビティについては、プライマリースクールの多くでサッカーなどのスポーツアクティビティが実施されています。また、夏休みを利用したサマープログラムも小学校施設などを利用し、ほぼ毎年行われています。実施主体は、UNRWA(国際連合パレスチナ難民救済事業機関)、UNICEF(国際連合児童基金)などの国連機関や、Save the Childrenなど子どもに特化した国際NGO、またはヘブロンなど周辺都市で活動する民間グループ等が演劇、または音楽などのワークを実施しています。

まとめ

スーリフは、ヘブロン他にベツレヘムという都市と、ほぼ同程度の距離に位置しています。二つの都市に移動するためには、サービスバスの運行など交通手段はある程度確立されていますが、最も近い幹線道路に接続する道路を分断する形で、分離壁の建設計画が立っています。それが進行すれば今後近郊都市部、特にベツレヘムに移動することがより難しくなります。教育に熱心な親たちのことを考えると、地域が孤立していくことで急激に子どもたちの就学状況に変化が起こることはあまり考えられませんが、家族や友人を通して経験する人権侵害や、将来に対する不安は深まっていくこと、心理的ストレスを感じる度合いも高まることが予想されます。他者との対話能力を高め、状況に対する無力感を軽減することは、ますます重要になってくると言えます。



調査協力団体

SURIF WOMEN'S COOPERATIVE



今回の調査事業に協力してくれた、

Surif Women's Cooperativeは女性による手仕事製品組合です。

スーリフの女性が作る刺繍製品は、淡いクリーム地にカラフルな糸が特徴です。

分離壁の建設によって土地が奪われたり、働き先に出かけられなくなったりで、

多くの男性が収入を失ってしまいました。

そんな中、彼女たちが手工芸品の生産、販売することによって家計を支えています。

1

YES THEATRE

ヘブロン新市街にある 青少年教育のためのシアター

イエス・シアターは2007年にヘブロンの新市街で活動をスタートさせたNPOです。100名程度を収容できる劇場と、2階建てのオフィスを持っています。スタッフは企画の立案や会計管理等を行うスタッフ2名と、作品の作成、ワークショップの実施を担当するアートスタッフ3名が勤めています。パレスチナ教育・高等教育省、パレスチナ文化省や、UNRWA、WARChiId(オランダ)、World Peace Service(ドイツ)といった国際NGOと協力して、ヘブロンでの演劇・表現教育に取り組んでいます。



Kids 4 Kids

12~18歳の地域の子どもを集め、それぞれの体験を話し合い、それを基に即興劇を繰り返したり、既存の小説・戯曲をアレンジしてひとつの作品をつくりあげるワーク。上演対象は父兄、教員、地域の人々。各作品につき、50回程度のセッションを行い、2009年には4作品を上演しました。子どもたち自らがグループの中で表現し、発信することでコミュニケーションの方法を学んだり、チームワークを築いています。



Play 4 Kids

小・中・高の生徒を招聘してアートスタッフが作品上演。学校の授業に含まれていない地元の歴史や、文化のエッセンスを取り入れ、自分たちが置かれている状況について考えを深めることを目的としています。上演後には必ずフィードバックの時間を設け、現在のパレスチナの状況と劇中の状況の共通項を見出し、問題発見能力を育てる取り組みをしています。2009年には3作品計73回上演しました。

劇団設立時、ヘブロンでは演劇に対してエンターテインメントというイメージが強く、子どもがそのような活動に参加することに難色を示す親が多かったです。また、敬虔なイスラム教徒のコミュニティでは男子・女子が混交するワークの実施が困難でした。しかし現在では、徐々にイエスシアターの存在も認知度が高まり、これらの問題は解消しつつあります。今後の課題は、ヘブロン地区全ての小・中・高を対象とした活動を実現するための団体の拡大、プログラムを回すための十分な人材の確保が必要です。



2

PALESTINIAN NATIONAL THEATRE (AL-HAKAWATI)

東エルサレムにある 唯一の国営劇場

パレスチナ国立劇場は東エルサレムの中心街を少し北に行った先、観光客向けの大きなホテルの裏にあります。1984年の設立以来、イベントウィークの開催や、映画ウィークの設定等、カルチャーセンターとしての役割を担っています。主に、パレスチナ自治政府文化省、教育省からの予算で運営されています。



International Puppet Festival

今年で17回目の長い歴史を持つイベント。主に子どもたちに向けた人形劇や演劇を上演しています。オランダなどヨーロッパからの劇団が中心に招致されています。また、公演日には劇場の外に手作りの遊具を置くなど、子どもが安心して遊ぶことができる空間を作っています。



TAM Theatre and Multimedia Arts: instruments for Peace - TAM

2008年にイタリアの団体Ente Teatrale Italianoを招致したサマープログラムを実施しました。147名の応募者の中から31名が選出され、70日間のトレーニング・プログラムを受講しました。プログラムでは劇場・演劇などの歴史を学び、身体表現などを学びました。受講者のうち、更に13名が選出されてイタリアで開催された演劇祭に出席し300名の観客の前で上演しています。このプログラムの目的は、若者に表現の機会を与え、異なる文化との対話を促すことです。また、異文化と出会うことで、パレスチナの文化的基盤の意識を高めて貰うことも狙いとしています。ところが、残念ながらパレスチナ自治政府の予算削減により、2008年以降実施されていません。サマープログラムが終了した後に再度招集することが検討されましたが、予算が得られず断念しました。

*予算拠出が主にパレスチナ文化省であるため、パレスチナ自治政府の予算配分に大幅に左右されます。また、劇場で上演される作品は、海外から招致した劇団数が大変多い様に見受けられました。これは、西岸地区の他の都市から人が移動することが困難であることも理由として考えられます。



3

AL-JAWWAL THEATRE

1982年から活動をする移動演劇グループ

アル・ジャワール・シアターは、東エルサレム在住のAl-Salaymeh兄弟2人によってはじまりました。開始以来、ガザを含めたパレスチナの全ての村や都市をまわり、小学校や施設などで公演してきました。“パレスチナ”の文化的背景を伝えることを目的としています。中心的な人物である2名に、地域巡回をすることにスタッフや出演者などが都度加わっています。



アル・ジャワール・シアターが直面する問題

1982年から25年間、様々な土地をまわり、公演を続けてきましたが、2007年以降、活動休止をしています。高齢になり、各地を回ることが困難になってきたことと、資金不足が主な理由です。同じ東エルサレムにあるパレスチナ国立劇場はパレスチナ自治政府から潤沢な資金援助を受けているにもかかわらず、地元劇団の招致が少なく施設利用ができないことから、小劇団は恩恵を受けることがありません。継続的に使用できる場所が無いため、後継者を育てることも難しい状況です。





CONCLUSION

子どもの教育に対して非常に熱心

既に60年以上も前から問題状況が引き続いていて、若い世代を育成することへの関心が高いことは、義務教育期間の長さ、就学率の高さから良くわかります。また多くの国際機関が入り、学校外の教育機会を提供しています。スーリフにおいてもサマープログラムという形で表現教育が実施されていました。



CONCLUSION

継続支援の必要性

しかし、パレスチナの現在の状況は、残念ながら直ぐに改善する見通しは有りません。短期的な機会提供だけではなく、コミュニティの内側から活動が発展していき、継続をしていく支援の形が必要と考えられます。

CONCLUSION

現地演劇団体との連携の可能性

今回の調査を通じ、現地で活動する演劇グループと演劇が青少年支援の一環として有効という認識を共有することができました。スーリフでの継続的な表現教育活動の展開のためには、色々な方策を考えることができますが、今回調査に協力してくれた演劇グループと次の様な連携を考えることができます。

スーリフの近郊都市ヘブロンで組織されているイエスシアターとの連携。地域に対する長期的なワークショップ開催や、グループ形成の支援、指導などが考えられます。物理的にもスーリフと距離が近く、また組織拡張傾向にあり、その目的にも適っていると言えます。人材不足の問題を解決する必要があります。

アル・ジャワル・シアターのように、小規模であるが活動実績のある団体と連携し、後継者育成の意味も含めて継続的な指導に当たることも考えられます。ただし、アル・ジャワル・シアターの活動主体の兄弟は高齢であるため、類似した状況の複数の劇団を動員する必要があります。

調査を終えて

これまでピースビルダーズは講演会や勉強会などを通して、パレスチナのことを知って貰う取り組みを行ってきました。会を企画している中、メディアの印象が強く、「パレスチナ=危険」というイメージを持っている方はまだまだたくさんいます。その意味でも、普通の人々、特に子どもや若い世代が自らの感情、感覚を発信していくこと、他者とコミュニケーションを取っていくことはとても重要と言えます。

今回の調査を通して、青少年が置かれている環境や、アクティビティについて肌で知ることができました。また、現地の演劇団体と、演劇を用いた青少年支援の可能性について、認識を共にすることができたことは大変大きな収穫と言えます。現在の状況が数年の間に劇的に変化することは望めないからこそ、こうした継続的な支援の必要性を強く感じ、今後の活動につなぐ重要な一歩となりました。